

種蒔く人

今橋 映子

東大比較文學會『比較文學研究』第107号、2022年1月、
pp.136-139.

芳賀徹先生は、二〇二〇年二月二十日にこの世を去られた。コロナ禍が世界規模の災厄へと広まる直前、それでもご葬儀に多くの方が集まることが出来たのは、不幸中の幸いであつたかもしれない。かつて何かの関西旅行で比較関係の数人がご一緒したとき、芳賀先生は、「あえてごだま」で帰ろう、と仰つて、小さなウイスキーのボトルやらビールやらを、ご機嫌で買ひ込んだ。人気の少ない車中の暢気な会話の合間に何を言い出すのかと思えば、「僕が死んだら、何人くらい葬式に来てくれるかなあ……」「あ、今日は授業だから無理だ」とか言つてあんまり来てくれないかなあ」などと仰るのである。それを軽口で鷹揚に受け流していた大澤吉博さんは、先生より先にあの世に旅立たれた。芳賀先生のご葬儀の日、その遺影を仰ぎながらそれをふと思ひ出し、遠く韓国からも弟子たちが参列した、心のこもつた追悼の時間を、先生は嬉しく受け取つて下さつたのではないかと、今改めて思う――。

芳賀徹先生の御逝去に、東京大学大学院比較文化研究学文化研究室を代表して改めて深く哀悼の意を表します。「東大比較」の歴史を振り返つて、島田謹二先生を仮に「第一世代」と呼べるなら、芳賀徹先生は間違いなく、平川祐弘先生と共に「第二世代」の旗頭だつた。研究室に残る記録によると、芳賀先生は一九八三年から一九八七年まで主任を務められ、その後の主任はすでに十名、三十年以上の時が流れている。一九九六年の大学院重点化という大改革を経て、比較研究室は大きな組織へと改編され、多様な専門家が集う、実質別の研究教育組織へと生まれ変わった。けれども比較文学、比較芸術、比較文化論を学ぼうと入学する大学院生にとつて、「東大比較」は今でも日本における主要な研究拠点の一つであることに違いはあるまい。芳賀先生たち第二世代は間違いなく、この「若く美しい学問」が、

東京大学内のみならず、日本や世界で正當に認知されるための学術活動を、旺盛な著作は言うに及ばず、あらゆる側面で推し進めたと言える。研究室の歴史の末端に位置する者の一人として、その大きな学恩に、改めて深く感謝申し上げたいと思ひます。

ここからは私自身の感懐を綴ることをお許し頂きたい。私が比較研究室に入学したのは一九八五年。学習院で中学以来大学まで育つた私にとつて、「芳賀徹」とは、何よりも魅力的な著作の著者として鮮烈にあらわれた。とりわけ『絵画の領分——近代日本比較文化史研究』（朝日新聞社、一九八四年四月）は、『講座比較文学』全八巻（東京大学出版会、一九七三年六月—一九七六年三月）

と共に、大学仏文科四年生の私にとつて、外部の大学院受験を決意させた思い出の書物である。今思うと当時は、文字通り僭越にも「こういう研究ができるのであれば、比較文学という学問は良いかもしれない」と思ったのである。インターネットなど全く無い時代環境の中で、新しい学問の実態を知ることが容易ではなかつた。『講座比較文学』を手当たり次第に読んで、目指すべき遠い指標となるような論文を発見し、そして『絵画の領分』に、研究世界はこんなに自由で広いんだという感動を得た。今思えばまだまだ幼い感想に過ぎなかつたが、それでも大きな人生の決断をするのに十分な根拠が、そこにはあつた。

「比較」に入学し、芳賀先生の授業にも出て驚いたのは、緻密な実証と豊かな本文評釈を展開するその著述から想像される以上に、豪放磊落な先生の授業展開の仕方であつた。駒場八号館のあのゼミ室を覚えている方も多いであろう。大学院とは思えないほど、いつも四十人くらいぎっしりと集まる部屋で、O・B・O・Gの参加もある。先生の論理展開の甘さに食つてかかる先輩院生や、目も覚めるような口頭発表を事もなげにおこなう留学生など、自由闊達さに溢れ、驚きの連続だつた。芳賀先生のお得意は、そうした準備周到な発表に茶々を入れること——「つて言つたつて、やつぱり三島はたいした作家じゃないよ」とか、「そうか、そんなこと簡単に言えるか？」などというような、いわば雑駁かつ無責任な感想から、評釈の細部の誤解を指摘するような冴えきつた批評まで、これは他のどの授業でも（その前も、その先も）出会えなかつた授業方法である。雑駁な感